村上忠順翁顕彰会報

目　次

○三河雑鈔 …… 1
○歴史探訪記 …… 5
○短　歌 …… 6
○漢字註釈 …… 6
○三河雑鈔考 …… 6
○表紙のことば …… 6
○編集後記 …… 6

村上忠順翁顕彰会報
第　6　号
編集　村上忠順翁顕彰会
事　務　局
発行　平成7年3月1日

発足七周年によせて

豊田市長　加藤正一

青葉にかおる風がここちよい季節を迎え、村上忠順翁顕彰会会員の皆様に謹んでごあいさつを申し上げます。

平成元年に顕彰会を発足され、それ以来国学者また歌人としての忠順翁の偉大な業績の顕彰に尽力され、地域での歴史や文化の伝承に大きな貢献をしてこられました。そんな皆様の着実で堅実な活動も早や七年を迎えられ、心よりお慶び申し上げます。

二十一世紀を目前にして、時代は大きな節目の時期にあります。このような折りに、将来に悔いを残さぬまちづくりをしていくには、原点に帰って考え、歴史に照らして学ぶことが特に大切と思います。「現代」が「先人」の歴史遺産のうえにあるとするなら、「未来」に対しては「現代」が責任を負うということになります。まさに、都市は永遠であり、市民の一人ひとりが自分の住むまちに情熱をそそぎ、大きな心で明日を夢見て語り合ってほしいと念願しています。

そういう意味でも、貴顕彰会の益々のご活躍を期待するとともに、文化のかおるふるさと創造に貢献されますようご期待申し上げ、会員各位のご健勝を祈念申し上げましてごあいさつといたします。

七周年を迎えて

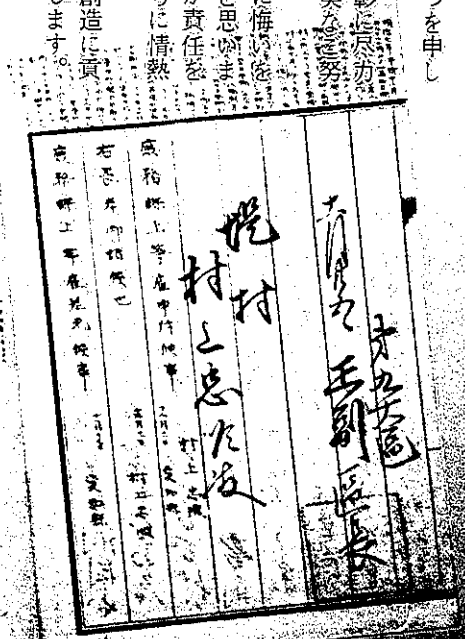
村上忠順翁顕彰会会長　石川隆之

平成元年一月に発足いたしました、村上忠順翁顕彰会は今年七周年を迎えることになりました。ひとえに会員のみなさんのご理解とご協力の賜ものであります。

発足当時よりご指導いただいています文学博士梁瀬先生を始め、豊田市、教育委員会等関係者のご支援をいただき、広く活動を進めることが出きました。心よりお礼と感謝を申し上げます。

振り返って過去六年間は郷土の偉人村上忠順翁を顕彰しふる里の歴史の調査研究と文化の高揚に寄与を目的に事業を行ってまいりました。一例として揚げれば、総会時に記念講演、忠順翁の足跡を訪ねる歴史探訪、忠順集の復刻本の配布、高岡コミュニティセンター竣工記念に忠順展の開催、五周年記念シンポジュームの開催など、多彩な事業活動を進めてまいりました。

これからも会員の相互の親睦や地域文化活動への参加で少しでも文化向上に寄与することができるでしょう。あと四年で十周年を迎えます。節目として忠順翁の足跡を一つでも多く顕彰できることを望んでいます。最後に今後も村上家のご協力とご支援をいただきますことよろしくお願い申し上げます。



前号（村上忠順翁顕彰会報、第三号・第五号）で二回に亘り忠順が慶応四年（一八六八）有栖川宮より「御用の義有之、急速駿府御本陣迄罷出候様……」とのことで駿府から江戸城西ノ丸へ入城し、御用を終え一路郷里刈谷城へ帰るまでの旅の日記「東征日記下」を紹介しました。

今回は、忠順著による「三河雑鈔」（愛知県郷土資料刊行会発行）から私たち身近な記事を抜粋し参考に供したくここに紹介することとしました。

尚、忠順自筆本は、現在刈谷市中央図書館に蔵されています。

三河雑鈔

解題

本書は三河国刈谷藩医村上忠順（文化九年四月朔日生、明治十七年十一月廿三日歿）の著である。

忠順幼より書籍に親しみ、生涯に数万巻を読破し、傍数百巻を写し取った。この読書好き謄写好きの忠順が読書中三河に関する記事に触る、毎に、細大洩さず之を抜抄筆録したものが即ち本書であって、郷土史研究上貴重なる資料を豊富に包含して居る。忠順が本書に手をつけたのは天保の初頃であって、明治初年頃までこの仕事をつづけた。

本書の原本たる忠順の自筆本は今刈谷図書館に蔵せられている。刈谷町の好意により原本を借り、茲に之を剞劂に附した。

凡例

一、原本は材料を得るに任せて筆録したものであって、順序もなければ、彙類もない。これでは検索に不便であるから、本書には各事項に番号を冠し、この番号による索引をつくった。

一、各事項に番号を冠した外は、すべて原本の通り印刷したが、原本通りの変体仮名では読みにくいから、本書は普通用ひらがゝものに直した。

昭和十年五月

愛知教育会

参河雑鈔叙

往古は風土記といふ書ありて國々の事情もよくしられたりしをやう〳〵にちりほひうせていまははつかに一二三四とかきかそふるはかりになむなりぬるはあかずくちをしきわさにこそ我参河のくには宝飫八名の二郡のみのこれいされど和銅また延長の時にはあらさるべしそはいかにもあれおのれもいかでさるかたのふみものせはやと廿歳はかりよりおふけなく思ひおこしてより古書ともに三河の事物も載たるきりかきとめむとふみよむまにまにぬき出つれどかたゐなかにて書ともおほくもたらすかるべき友とては一人たになく又いへのなへいそかはしくて夜のみものする事なれは廣くよみあまねくつしえむ事はいとかたしかしかゝわば風土記ふりにものせむことはさらにもいはずかの概畧をたにえしあへさりきなほいのちあらばかたなりにもなしてむとは思ふものから世のことわさしげきをいかゝはせむ筑前の国あら津の貝原氏のことき力ありかとある人すら十とせあまり六とせを経て十七あまり四歳の冬續風土記書をへてその君に奉られしよしなり此翁はもはらこの事にかゝづらひはた姪好古とともにいそしみつとめたれはこそいみじうめでたくいで來にたれおのが如ちからなくかどなく又いとまなき身にてはいかゝはせむされは風土記さまにものせむことはさても有べし猶夜な〳〵ふみ見むまにまにかきもしうつしもせむと利心ふりおこすものからいふかひなくおろかにてせむすべなくなむ

天保十二年正月

於保武祢

此書参河国ニ関係ルコトヲ古今ノエラヒナク雅俗ノケジメナク見ルニ從ヒ得ルニ從ヒ物シツレハ前後ノ差別ナクイトミタリカハシク拙ケレト素ヨリ編集ノ書ニアラサレハイカ、セン

松平徳川ノ事蹟ヲ抄セムトスルニ十巻ニモ書ツクスヘクモアラネハスヘテ略ケリソノ委細キ事ハ烈祖成蹟成功記大三河志等ニ詳ナレハ其書共ニユツリヌタマタマ一ツ二ツ採載タルハ原本ノ因ニヨリテ也

此鈔思ヒ立シヨリ既二十年ニモ餘リヌレハハヤク抄セシ事ハ忘レテ再ビモノセル條々モ有ベシ重複ヲ削リ部立ヲ改正サムト思フモノカラ世ノ事シゲキニカイマキレテエモハタサズナム

〈以下、本文中より抜粋〉

八二（源平盛衰記四十五ノ二丁）二村山ヲ過ヌレハ三河国ハ橋ヲ渡給フ昔業平カ劇草ノ哥読タリケルニ皆人袖ノ上ニ泪ヲ流

ケル所ト覚シケルモ御涙セキ敢玉ハス矢矯宿ヲモ打過テ宮路山ヲモ越ヌレハ赤坂宿ト聞エケリ三川入道大江定基カ此宿ノ遊君カ壽ト云ニ後レテ真ノ道ニ入事モアラマホシクヤ思召ケム高師山ヲモ過ヌレハ遠江橋本宿ニ着給フ

一〇四　尾張名所図會一巻　平針駅　昔の駿河海道の宿駅也今もこゝより三河堤村へつきて岡崎へ出る大道の馬つき也

同　鎌倉古道　今の海道より半里はかり北相原村より二村山をこえ境川をわたり三河の八橋へ至る道也二村山の南麓に並木の老松ありて古のさま見るか如し其東に十王堂の址ある比の辻堂なかりしといふ又十三塚もあり

三一四　池菴橋守翁筆

勝地徒跳参河国之部　自六十五葉至九十二葉

池鯉鮒―自鳴海二里十三町　苅屋領御旅館―入口二在

池鯉鮒大明神―通町ヨリ左ニ在社領廿石苅屋ノ城主ヨリ寄附也　神主永井主殿　別当惣福寺

式　参河国碧海郡知立神社〇法蔵寺禅〇浄雲寺浄　慶長記慶長五年ノ条下

池鯉鮒野―半里四方ノ廣キ野也毎年四月三日祭礼スキ四月五日比ヨリ五月五日マテ牛馬ノ市を立ル改ニ

池鯉鮒ノ馬場トモ云リ

追分―チリフ野ニ在是ヨリ左ノ細路ニ入ハ八橋ノ道ナリ

左堤〇平針〇追分―平針ノ村中ニ在右に赴クハ信州諏方ヘイツル路ナリ

右伊保―自平針三里尾三ノ塚〇阿須川一里〇武節三里〇根羽村三里此処ハ三甲信ノ境也〇間山信州ノ内深山也　〇平屋三里〇浪合三里〇駒場三里〇飯田三里〇市田一里〇片桐三里〇井田二里〇宮田三里半〇太田切橋アリ〇井鍋二里〇高遠二里〇次ハ鳥頭坂村追分ノ右ノツ、キニテ東海道也

三一六　西加茂郡四郷村種子交換會開場式祝詞　郡長葉母　田中正幅

夫人タル者ノ片時モ不可欠ハ衣食ハ誰ノ手ヨリ成レルヤ皆農ニ頼リ農ヲ仰キテ人民白用ノ生活ヨリ政府国家ノ経済ヲ行フ事ヲ得ヘシ故ニ扶氏モ農ハ国家ノ父母也ト云リ然ニ我国古来農ヲ本トシテ国ヲ立テ農ヲ重ンジ農ヲ励ムモ農学ノ設ケ未備農業ノ道誰カ請スル者无ク農家ノ其業ニ於ルヤ僅鋤ヲ採テ田ヲ耕セハ農ノ業至レリ種ヲ播キ草ヲ耘レハ農ノ道盡セリト菜蔬ノ茂ラズ菽麦ノ不熟セハ季候ノ寒暖ヲ愆ルニ起リ地質ノ冷熱ヲ差フニ田ルト其甚キニ至リテハ天災ノ惨マシキモ季候致ス処ニシテ人力ノ能駆除ス可ニ非ス秋収ノ減スルハ種質ノ悪キニ起レハ他ニ救フ可キ術ナシト一二天ニ任セ年ヲ罪シテ恬トシテ顧ミス換気ノ法以テ季候ノ寒暖ヲ救ヒ培養ノ術以テ地質ノ冷熱ヲ防ク蝗害ノ豫防ス可キ種子ノ交換ス可ヲ知ラス秋収年ニ減ジ穀菜月ニ耗ルモ拱手傍観シテ更ニ意ニ介スル无キハ実ニ農家ノ為ニ憫ミ国家ノ為ニ可患ノ至ナズヤ殊ニ種子交換ノ如キ或ハ其良法タルヲ知ルモ農業未タ開ケズ農業未タ熟セサルヨリ更ニ交換ノ道无クシテ実益ヲ試ム者尠シ是故ニ明治十一年二月全郡ヲ八部ニ畫シ始テ談農ノ會ヲ開キ稍勧農ノ緒ヲ開クモ之ヲ実地ニ試ミ実用ニ徴シテ其効実益ヲ視ルナク徒ニ虚理ニ渉リ空談ニ馳ルノミ斯ニ全郡各村吏ニ協議シテ例年二月ヲ期シ種子交換場ヲ設ケ各家ニ収ムル米穀ヲ列ネ各人ノ植ル菜蔬ヲ携ヘ各自ノ好ミニ任セ望ニ从ヒ甲乙相交換シ彼我相貿易シテ互ニ良種ヲ競ヒ奮テ秋収ノ増多ヲ実ニ各家繁栄ノ本ニシテ本郡段富ノ源ヲ得タリト云ヘシ然ニ若シ種子交換の設有ルモ或ハ奇種ヲ扞異品ヲ掬テ出品謀リ或ハ徒ニ出品シテ交換ニ意ナキ時ハ玩戯ノ一観場ニ過キスシテ何レノ日カ其実益ヲ視ルヲ得ンヤ冀クハ各自常ニ播種セル種子ニ就テ彼我相換ヘテ其地ヲ遷シ瘠地ノ種子ヲ肥地ニ播ケハ繁茂シ易ク南西ノ地ヨリ種子ヲ扞シテハ収穫ヲ益ス如ク互ニ種子ヲ精撰シテ秋収ノ多キヲ求ルノミ農夫ノ多キト耕地ノ廣キニ頼ラス夏畦ノ労ハ肥料ノ費ヲ須タズシテ秋ノ増多スルハ豈ニ美ナラズヤ試ニ種子ヲ交換シテ田一歩ニ米三勺ヲ増セハ本郡水田反別凡三千八百五十八町二畝十歩二一年ノ収益凡米三千四百七十二石二斗二升一合を増加シ十年間ニ其収穫ヲ増ス凡三万四千七百廿二石二斗一升ニ至ルハ此交換ノ一挙ニ在ノミ故ニ近時東京三田育種場及ヒ上野ニ種子交換ノ會有リ大坂ニ綿種ノ交換ヲ始メ縣トシテ交換ノ法ヲ不設ケナク郡トシテ流通ノ便ヲ不開ハ元シ全郡ノ諸氏苟モ農耕ニ從事スルモ豈勉ザル可ンヤ励マサル可ンヤ明治十四年二月廿五日種子交換場ノ開業ニ際シ深ク望ヲ將來ニ属セハ祝詞ニ代ヘテ一片ノ姿心ヲ述ヘ以テ諸氏ニ告ク明治十四年二月

田中正幅

下総(両国家勧農局)牧羊場ニテ製造ノ農具(愛知県ヨリ依頼アリ)馬耕法牡馬四斗曳(俗ニ云フラフ器械)ノ器械ヲ志田実氏ヨリ廻送有リ今度碧海郡藤井村開墾場ヘ廻サル(明治十四年三月アイチ新文)

三四〇　道路　加茂郡足助村ハ五百戸不満ノ市街也商人運送ノ荷ハ牛馬ノ外不通路ヲ憂ヒ郡長辻左右氏盡力シテ岡崎(三河)飯田(信州)街道其村々縣道修繕シ二間幅ノ平地ト成リ谷川ハ橋ヲ架シ水災无ク目今荷車牛馬ノ出入繁栄可驚ク依テ之ニ各商日々ニ盛大ノ勢ナレハ人民ノ幸福不少郡長ノ尽力顕レタリ(十四年四月官報雑志六百九十三号)

三四三　宮地山の麓に三頭山長福寺と云寺あり境内の山ノ上に石あり女郎石といふ其大サ尺余下の方窄く高四尺許其根を堀て見むと土を堀ル事一尺余にしていまた其根をしらす相傳へて云フ昔此所に力珠(リキシュ)女(ヒメ)といふ女あり大江ノ定基(後ニ親鸞ト云)といふ人と契る事有り然るに定基たえてあはず故に恋したひて死す其魄石となるといふ(マヌホノセ)

三四四　源親氏主称ニ世良田舎弟泰親主号松平譜ニ云後花園帝御宇某大臣配流三河国尋勅免上京ノ時扞供奉之士泰親依徳川源氏供奉ス依之被称徳川ト云々然モ自親氏主至清康主皆称世良田神君永禄九年十二月任参河守近衛時嗣内書ニ記ラル徳川三河守是始欤(青葉園隠筆)

三四五　永亨元年世良田親氏三州松平ニ入ル云々宮方右京亮政義ノ孫有親ノ御子太郎左エ門ト号ス(青葉園隠筆)

三四七　浄瑠璃　浄瑠璃の初りは信長ノ待女、小野於通より始る此女秀才ノ聞エ有後ニ秀吉ノ簾中ニ仕ふ昔安元ノ比参州矢作ノ長者と云有り家冨栄えけり一人ノ娘有り浄瑠璃御前と云其比牛若丸奥州秀衡許へ潜行の路次此矢作ノ宿に宿り思はずも長者か娘と契りぬ牛若東行ノ後女恋慕ヒ行て死シたり(此女ハ浄瑠璃薬師ニ祈て設たる子なれは浄るり御前と名付ク世界とて薬師ノ浄土ある故なり)お通此事を文章に作り十二段とす其本源薬師の浄瑠璃光の縁眷族の十二神將をかたとる十二段とし浄瑠璃物語とはいふ岩船検校ふしを付て浄るりという其後瀧野沢角両検校三線ニ合て曲節を語る又其比六字南無右エ門と云女太夫四条河原ニ芝居を建テ慶長ノ比人形と度々(慶寛後陽成院)ニ入禁中に召る(浄るり太夫受領を賜る人形師ノ名目にて受領す)お通か作より浄瑠璃と云名目爰に起る古キ事也

三六三　林道春丙辰紀行ニ三河国　汐見坂より二河の間タに纔なる溝あり是なむ遠江三河の境なりといういつそや菅野真道か史を見侍しに持統天皇三河ノ国に行幸ありとしるせれと何レの郡郷何レの村里といふことをしらず真道は光仁桓武の時なれば世久しくして知ラさるにや事略して洩ラせるにや口惜

三六四　吉田　江戸より京までの間に大橋四有武藏の六郷三河の吉田矢矯近江の勢多也ひとり矢矯のみ土橋なれは洪水によりて絶る事もあり此比新タに板橋となりけるにや爰にしも誰か周処か三害をやめて畜候か一編を傳ンや

三六七　八橋　八橋は杜若の名所なる事在中將の哥にてかくれなし今岡崎より池鯉鮒に至る道より北ノ方一里許りにそれならむ昔の八橋なりとて所の人はるかに指をさして教へ侍り久しく田となりて今は杜若なし三四年前余か作れる詩にも古人遺跡鐵鏘歩只有三河杜若ノ名となむ　丙辰紀行

八橋

名におふ三河の八橋はこゝそその古跡なりと人の教けれと名はかりにて今はそのしるへたに残らすかの業平の昔語のみそまのあたり見るやうにおほへはべる

ふりにたるあとに消ぬかきつばた言葉の花を千代にのこして

三六八　矢矯橋　昔乱レし世には此川橋もと絶せしとなむ道行ふりに語る人きく人しるしらぬみな感を催さぬはなしげにも治れる御代のしるしいちしるくさかまく水の流レは雲を洗ふに似たりといへと東往西来の人悠々として渡るありさま花の筵をあゆむが如し生とし生るものいつれか此ひろき恵にもれむ矢はきの橋と名つけしは里の名によりていへと猶ゆゑある事ならむとゆかしあふ人毎にとへとこたへす木幡山をわけ入心いとわひし

弓はりのすかたなからに
引かへて矢はきのはしと
だれ名つくらむ

三七二　ミナモ中將東紀行ニ三河の国に至りぬこゝなむ八橋の跡なるといふを見れば名のみ残りて橋の跡さへなくちひさき川一つむかしわすれす流出たり

あとをしも三河に朽し

八はしや水ゆく川の
名のみなかれて　東紀行

四一七　馬耕開墾　碧海郡藤井村馬耕墾場は佐橋氏の指揮により生徒も馬も熟達して迅速目を驚ス事にて一日ニ六反歩を開墾する便利法ノ由　明治十四年十一月愛岐日報

五二一　参河国猨投村と云所には昔より碓を禁とそれは其処にさなぎ山と云に式の狭投ノ神社ありて今も大なる社なる或は景行天皇を祀ると云ヒ或は大碓命を祀ると云り　吉事記傳廿六

五七八　三州加茂郡高橋荘狭投神社　大碓命ト云り大碓皇子八景行天皇御子牟義公阿礼首池田首等始祖也然大碓皇子登狭投山中蛇毒薨ト本縁アルニ日本武尊登膽吹山同然レハ狭投神示日本武尊ニ似タリ度会延経云御使朝臣祖ハ景行天皇子気入彦ノ命ナリ三河国使賊捕仍テ姓ヲ賜ハル続日本紀及姓氏録ニ見ユ若命ヲ祭ルカ大碓皇子ハ美濃国牟義ノ祖ナリ三河ニ故アル丨見侍ラスト云又狭投榛社十五所ハ大概日本武尊御子佐伯命ハ参河国御使ノ祖ナル由見エタリ能思ヲ致スヘキニヤ　塩尻

五九三　○参州猿投山神宮寺徳川家御位牌ノ中
親氏公　康安元年辛丑四月二十日卒トアリ
泰親公　永和三年丁巳九月二十日卒去トアリ
右年号可疑康安元年ハ尊氏没後四年也　永和又義満ノ代也然トモ有本拠欤　家忠日記増補ノ追加ノ発題二日親氏主康正二年四月廿日卒ス

六〇三　鎌倉に谷をヤッと呼江戸にてはヤと云一カ谷四ツ谷等の如し尾州には湫をクテといふ木曽路にては沢をナキ櫻沢の如しの三州にては平と呼ふ地多し郷談同しからす　汐尻上

三州ニ井ケ谷廣久手ナトアリ一概ニイフヘカラス長久手大久手ナト諸国ニ多シ

六〇九　開運録　岡崎大樹寺　西光寺　勢誉上人　登誉上人　記之

此説多淨土宗門ヲ主張シ神君御尊敬ノサマヲノミ面ニシテ書シカハ取ニ足サルモノ哉彼書云長阿弥三子アリ一男徳阿弥二男祐阿弥三ハ女子妙阿弥ト云家臣両人出離シ不解不能不阿弥ト云徳阿弥六歳祐阿弥四歳妙阿弥ニ峯ニシテ父ニ後レ三年ノ後母公過サセ給ヒケル云々按ニ此説不審長阿公ハ徳阿公御逝去ノ亨徳元年七月十四日逝ス三州大浜村称名寺ニ墓所アリ徳阿公十六歳之時奥州へ下り塩釜ノ辺ニ住菴シ二十歳ニ成テ上方へ上り其年藤沢道場ニ三日逗留夫ヨリ三州坂井村ニ入り給フ徳阿弥ハ親氏祐阿弥ハ泰親ト改給フ親氏ハ一男を儲玉フ徳太郎ト云同国松平村太郎左エ門ト云冨家アリ或時親氏彼レカ宅ニ入テ同見給フニ一族集リテ連歌アリ執筆遅カリケレハ親氏を請シ入執筆セシム太郎左エ門ハ家督ヲ譲リ其年ニ死ス親氏両息出生ス竹若竹松トソ申ケル妙阿弥尼公太郎左エ門カ舘ノ辺高月院ト云アリ其門前ニ菴ヲシツラヒオキケリ塩釜六所明神ヲ舘ノ内ニ勧請是奥州在居ノ時家門ノ再興ヲ祈給ヒシ故也竹若君十四歳竹松十二歳親氏逝ス泰親兄弟ノ御子ヲ介抱シ玉フ親忠ヲ岡崎三郎○童名ヲ竹千代ト申ス當代々ノ童名是ヨリ始ルト云々西光寺ノ勢誉過底ヲ召テ淨土宗ノ傳法アリ此時公ハ廿九歳ト云文明七年伊田野ニ寺ヲ建成道山松安院大樹寺ト号ス勢誉カ号セシ所也其年十月九日ヨリ十五日マテ十夜佛事是ハ伊田合戦追薦ト云々　宿景拾葉録

六一二　石川丈山俗名石川嘉右エ門　三州保美ト云処ノ産也父石川某ハ愛智郡長久手陣ニテ打死セリ神君忠死ノ名誉ヲ下署　宿景拾葉録

六二九　小野小櫻は天文年中の宮女也故ありて三州幡豆に配せられし其住ける所を今に小野谷と呼ふ小櫻後に三浦彈正忠保房に嫁して男子を生す

三浦彈正保房　三浦勘解田保清母ハ小野小櫻　小野修理ノ亮時房　母姪　汐尻四十三

六三一　服部半蔵は伊賀ノ先方武功の者也三州に来りて公に仕へ五百俵の俸を食し後一万五千石賜ふ然るに故有て浪人す松平越中守宣綱ノ婿なかりしかは彼家に客食し大坂の役に働も有しか其死体なかりし故重ねて召出さるゝに及ざりしこそ本意なき事なりけれ夫より子孫今に至りて来名に仕へしか宝永八年の春主人定重朝臣越後ノ高田へ改封に依て服部氏も北国に移りぬ　三月廿八日下総守入替る　汐尻四十四

八〇〇　設楽郡稲橋村古橋源六ハ世々里正タリ郷里ノ人ヲシテ節儉ニ人ハシム四十年前一村戸毎ニ杉二

千本ヲ殖シメ其手入怠ラズ方今頗ル成木スト聞く同村ノ最貧ト云者モ一戸一千円ノ不動産有リ是レ無他毎戸二千本の杉ヲ持ル故也ト譬ヘバ極蕨ニテ一本五十戔と見積ルモ即チ千円ト成ル況ヤ他ノ不動産ヲ有スル者ヲヤ　愛知新聞千四百二号

八〇一　頃日内藤魯一荒川定俊宮本万樹等国会請願惣代トシテ東京ニ出来東京ニ在ル同郷ノ士ト共ニ明治十三年十二月二日愛知縣懇親会ヲ神田區旭楼ニテ開ケリ而シテ宮本荒川ハ臨会セズ各員言ント欲スル所ヲ演ヘ甲唱ヘ乙和シ同郷ノ誼ヲ盡セリ　愛知新聞千四百十一号

八〇二　或人近代三河ノ国安部山人都ニ上リ名アル遊女ノハケル履ヲ採テ笛ニ作テ阿部ノ山中ニ入之ヲ吹ニ鹿ノ多クヨル事常ノ履ニテ作レル笛ヨリモ増リテシルシアリト語侍ル　徒然草　野紐抄

八一一　三河国ハ南海ニ臨ミ東遠江ニ正接シ北信濃美濃ニ界シ而シテ西堺川ヲ以テ尾張ニ界ス全国八郡アリ地勢略方形而シテ東南一大長岬有テ坤位ニ指ス其頭処を伊良胡ト云フ西南志摩ニ對ス岬ノ半一角大地ノ角ト對シテ湾ヲ包ム湾ノ当中ヲ豊橋ト云豊川北ヨリ来リ豊橋ヲ過テ湾ニ入ル其上流東ニ鳶ノ巣山アリ西ニ長篠アリ其北ニ鳳来寺アリ国ノ中心ヨリ稍西ニ松平アリ其西南ヲ岡崎トス皆徳川氏ノ故地也矢作川北方ニ発源シ西ニ流レ南ニ折レ東足助川ヲ合セテ岡崎ノ西ヲ過キ又東ニ大平川ヲ合セテ海ニ入ル国中小山多シ木綿石炭ヲ産ス南北朝ノ時一色吉良ニ氏之ヲ分領ス其後新田氏ノ裔世良田有リ八世ノ孫ヲ徳川家康トス家康ノ幼ナルヤ織田氏来リ侵ス今川氏之ヲ救ヒ小豆坂ニ戰ヒテ之ヲ走ラス家康長スルニ及ヒテ岡崎ニ居リ漸ク国中ヲ平定シ己ニシテ治ヲ遠江ニ移ス其後織田信長ト力ヲ戮セ武田勝頼ヲ長篠ニ破ル豊臣氏東征ノ後徳川氏ヲ関東ニ移封ス関ケ原役後復タ徳川氏ニ歸ス　兵要日本地理小誌上

八二八　東加茂郡宮口村六所山ハ樒（シキミ）多ク生茂シ土人採テ佛前ニ供ントテ瓶中ニ挿シオケハ群雞来リ其実ヲ食ヒ盡シヌ数時経テモ苦痛セズ恰モ人ノ美味ヲ食セシカ如シ其訳ヲ土人ニ聞ニ抑々此近傍ノ諸山ニハ樒繁茂シ実熟スレハ皆諸鳥ノ餌食トナリ食ヒ尽ス也若シ其実ニテ中毒セハ小鳥ノ死体堆ク在ルベキニ末タ之ヲ見シ者无シト云如此鳥ニハ害无クシテ人獣ニ害アルハイカナル訳カ博識教示アレ　明治十四年一月アイチ新文

九一三　碧海郡堤村瑞應寺記録

朝比奈忠喜者武徳俊偉文韜清遠而継織蒲之緒遊官於江都也一日袖来家譜並序一篇謂予日以此篇欲蔣干三陽瑞應禪寺請爲序焉蓋爲令彼地親属不廃祖考之祭也熟読其所譔之篇乃孝心油然溢于言表凡有心者誰不皆感激乎嗚呼如子者可謂於本而能盡其心尚入彼仁与戒之深奥者也不口盡志於當時柳亦貽謀於後世不堪隨喜終爲是書云尓

宝永二龍次乙酉七月初五洛東獅谷苾芻海音瑞書縁山北渓僑居

歴史探訪記

第六回　村上忠明所縁の地
天誅組を偲び大和東吉野村

鷲家・小川地区を訪ねて

天の下青人草もおしなべて
　君が御楯（みたて）と出て仕へよ　忠明

これは彼の辞世であり又あまりにも大義名分を解せざる当時の国民に対する彼の義慎でもありましょう。

さて今年度の歴史探訪は、村上忠明（忠順次男）に的をしぼり忠明所縁の天誅組挙兵と無念　なお漂う終焉の地東吉野村紀行となりました。

忠明は字を明卿望齋と號し、国学と松本奎堂に学び尊皇の志深く、文久元年奎堂に從って上京。文久三年七月一旦帰国、このとき大和行幸を聞き急ぎ上京するも同志はすでに出発（挙兵のため）していた。忠明は後を追わんとしたところ、義軍利にあらず大事すでに去りぬと聞いて京に留まる。かくて天誅組の土は山深い吉野の地に露と消えました。

今回もバスは満席となり好天に恵まれた旅でした。

東吉野村では地元の「天誅組顕彰会」の方々に望外の心のこもった案内とおもてなしを受け感謝にたえません。

天誅組の挙兵は、明治維新の魁としてその志ならず最期を遂げたその無念の足跡は村中にしるされ、今も大切に保存されていました。

私たち一行は、供花香煙をたむけ主にその中心となった小川、鷲塚両地区の案内を受けしばし往時を偲ぶことが出来ました。　甲戌十一月九日

合掌

短歌

忠明と天誅組の説明の詳らかなるに感銘に聞く

奎堂の遺徳を偲び遙拝せば一陣の風我に吹きくる

天誅組九人の義士の墓苔むせたどたどと読みその名拝せむ

燃ゆる意を熱血に染めて天誅組明治維新に力つくせし

高見山正面に見て暫し憩い賞でいれおれば往時しのばる

甲村みつ江

色づきし吉野の野辺に義士たちの苔むす墓に香煙ゆらぐ

秋深む義士の墓への山道は木洩れ日冷えいて桜葉敷きける

楓葉の深紅に燃ゆる一枝王政復古の血潮思ほゆ

田中　敬子

漢字註釈（三河雑鈔）

棄…イ　棄類…イルイ　たぐい

乂…なり　也

亅…こと　事

㐮…リウ・ル　留に同じ

虗…コ・キョ　むなしい　虛の本字

从…ショウ・ジュ　從の本字

扞…カン　ふせぐ

掬…キク・コク　むすぶ・すくふ

冀…ネガヒ　願に同じ

苛…カ　わずらはし　きびし

豈…キ・ガイ・カイ　よろこび

无…ム　なし

欠…ヨ・カ　か・疑問推測に用ふ

眷…ケン・クワン　かへりみる

爰…ココニ　此々に

纔…サン・ザン　わづか・いささか

鑪…リヨ・ロ　いろり・ひばち

猨…エン　猿に同じ

碓…タイ・カラウス　石うす

薨…コウ・ヲハル　公侯の死すること・我国では三位以上の人の死

仍…ジョウ・ニヨウ　より・よって

菴…アン・イホリ　庵に同じ

醫…タトフ・タトヘ　たとへる

況…キヨウ・イハンヤ　況に同じ

戮…リク・ロク・リウ　ころす

樒…シキミ・もくれん科常緑木

雞…ケイ・ハトリ　鶏に同じ

三河雑鈔考

忠順は、生涯に数万巻の書を読破したと言う、生来筆まめな忠順とはいえ読書のかたはら三河に関する記事に触れるごとに筆録した、読書に加えてこの量は大変なものである。

忠順筆録は天保の初めころ（二十才代）に始り明治十四年ころまでつづけられた。およそ五十年間である記録は十数冊におよんでいる。

その内容は三河に関すること広範に亘り、古の三河より明治までその項目は九百余り、特に地名にまつはる歴史、人物など参考になることばかりである。又八橋の記事が多くかっての名所の変遷やあまたの書物に記されていることがいかにもよく見える。

又三河雑鈔巻末に忠順は、明治十年は在原業平一千年になるとし、人々にもすすめてみたままつりをすることとしたこれはうれしいことであると一文を残している。

そして「在原業平朝臣一千年の霊祭に八橋懐古と云事を」と題し、およそ二〇〇名から二百余首の歌を集めて業平の追悼をしている。

明治に至り新聞（愛知新聞・愛岐日報）の記事が多く見られる、思うにこのころ忠順は七十才であり晩年である。（明治十七年七十三才歿）

三河雑鈔原本は刈谷市村上文庫に蔵されている、これを愛知県教育会が昭和十一年に一冊にまとめ発刊した、昭和四十九年には愛知県郷土資料刊行会が五〇〇部（七五八頁）限定再刊されたものである。

表紙のことば

東吉野村は天誅組終焉の地である文久三年九月二十四日戦況最悪の中松本奎堂（三州刈谷）は篤籠人足に逃げられ村上万吉を伴ない東吉野村伊豆尾山中を峰づたいに東行中彦根勢の銃撃に合い無念の最後を遂げた高見山を遙かに望むこの山頂には奎堂に従う万吉が寄り添うように二つの墓が建てられている。

編集後記

年一回発行の当顕彰会報も回を重ね今回で第六号となった。早いものである。顕彰会も発会以来七年を迎へる、過ぎ去った一年一年はおよばずながらも顕彰の課題への挑戦であった。おかげで忠順翁の事績がわずかでも明らかになったことはよろこばしい。今号は三河雑鈔を抜すいし紹介した、会員の皆さんの机上の糧となればと思いつつ。